

オリーブの樹

第88号

2009年4月30日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 四月の歌
- P 3 独居より オバマは広島長崎に来て謝罪し、
核軍縮を实践すべき 重信房子
- P11 重信さんとの交流コーナー
- P13 リッタ闘争断章 ユセフ檜森さんのこと 重信房子
- P18 読者からの声
- P19 シゲに捧げる「私小説」その76 山田美枝子

重信房子さんを支える会

四月の歌

重信 房子

雨あがり洗われし空に朝日さす待ち焦がれたる友三人来たる
 草むらに隠れた光を拾い上げ夢に紡ぎて君に捧げん
 父の吹く草笛に似て細き音明けの空より聞こえる命日
 慰めの言葉はあらず友の文触れない事実によさしさを知る
 山吹の咲き並びたる一枝を千切りて思案反抗期の頃
 つつじ燃えて君の白衣を染め上げるガザ空爆の幻の春
 落ち花を肩に浴びつつうつつむいて別れの言葉を探していたり



独居よい) 4月1日~4月10日

オバマは広島長崎に来て謝罪し、核軍縮を實踐すべき

重信 房子

4月1日 桜八分アクリル板に手を重ね

旧友と語らう新たな挑戦

さあ4月、と思ったら、雨の寒い日になりました。3月21日に開花した東京の桜もこの頃の寒さ戻りのためにゆっくりと花持ちが良いらしい。もう開花から10日たっても、満開はまだらしい。でも獄の庭はこれからです。ルーバーの1センチの隙間から庭の桜の樹を角度を変えつつ透かしてみても、まだ花らしい色は見えません。

今日から新年度。長く海外に居たので、税金も払わなかったし、3月年度末、4月新年度というサイクルはとっくに忘れていて、なかなかピンときません。桜と共に入学や就職の区切りとして思い出すばかりです。

運動場に出ると寒い雨。プランターの菜の花の茎がひよろひよると伸びて、頭にまだきれいな黄色の花をつけながら、横にびんびんといくつも種を付け始めました。花を掻き分けて根元を確認すると、蟬はまだ居ます。この蟬は彼岸前の春嵐の後の週明け、運動場でじっと屈んだまま天をにらんで、果てているのを見つけたものです。油蟬を、彼岸蟬?! と名付けて菜の花の根元に叩きました。今頃蟬なんて何かが起こる予兆だろうか……と驚きました。今日は雨の雫が菜の花を濡らしていましたが、蟬は土の上で生き返ったようにじっとしています。

まだ走らずに裸足で早足で歩くだけにしています。先日走ったら、やはり後でお腹が痛くなってしまったので、少しずつにしています。

冷たい水で裸足の足を洗って、房に戻ってすぐ面会。高校の友人のヤマ(山田美枝子さん)。「オリーブの樹」に連載している物語の娘にはもう3人目の子どもが生まれて、孫自慢のヤマは、3人の写真を見せてくれました。ありがとう! 私たちの話題の中心は手術のことと選挙への挑戦のこと。「大腸癌は大丈夫。友だちに聞いたけど、時々腸閉塞起こるらしいけど心配しないで」と、早口で圧倒的に口数の多いヤマにうんうんと頷きつつ、手術の話。それからヤマが挑戦した市議補選。予行演習になったようです。かなりの票を取ったみたいですが、惜敗。次の本選に向けて挑戦中。ヤマは市議会を監視しては公開を旨として、オープンに語って

いるので、「あ、山田さんに書かれないように、ちゃんとして、市議会も引き締まってきたと言う人も居るのよ」と、明るく笑っています。この経験は、ヤマの実力をますますパワーアップしたようです。もともとエネルギーを持て余していた人、市議選は最善の選択です。新しい挑戦。選暦を過ぎたらこうでなくっちゃ! 今から市長のたじたじが目に見えますよ。私の新しい挑戦はね……と、わいわい! とやっているうちに、もう10分。おいしいなあ……。一昼夜でも語り明かしたいのに……。「3・28土地の日の集い」にヤマも来て発言していたこと聞くのを忘れてしまいました。

「土地の日」は、また、檜森さんの花炎忌でもあります。私が彼の抗議の死の知らせを受けたのは、4月1日、エプリル・フールの日、今日でした。今も驚きが胸によみがえります。合掌。

今日はエプリル・フールですが、私にとっては、昨日がエプリル・フールでした。関西「さわさわ」の中心のTさんが痛(胃と食道)で手術した後、意識が戻らないという手紙を受け取って、「消化器系手術で意識が戻らないのは、医者ミスでは?」と心配の手紙を森本さんに送った夕方、Mさんから「Tさんの大手術は成功して歩いておられるとのこと。写真も届くでしょう」と、180度真逆の情報が届いたところでした。とにかく、Mさんの情報を信じることにしました。

今日の朝日新聞は「拘置所視察委が意見書」「死刑執行『事前に本人に告知を』」の記事が出ています。東拘の視察委員会が改善を促す意見書をまとめ、31日に東拘当局に提出したと言う記事です。この改善案の中に死刑執行に関して「少なくとも一兩日前には本人に告知し、最後の身辺整理などに時間の猶予を与えるべきだ」という点が指摘されているようです。「意見書は、告知が執行直前に行われていることが『死刑確定者』の心情を日々脅かしている。再審・恩赦請求を侵害する恐れもある」と指摘。「60年代には事前に告知され、家族と面会した記録もあることから運用を見直すよう求めた」との記事です。希望する人に執行の事前告知は、死刑制度を問うためにも、まず現在できる

当然の要求です。獄の管理処置の都合であまりに人権が侵されています。

この視察委は監獄法に代わる新法によって、法的に設置が義務付けられ「第三者委員会」として改善提言をはじめ2年ばかりです。「弁護士や福祉関係者ら外部委員で構成される同拘留所視察委員会は昨年11月、全収容者約2100人を対象に初のアンケートを実施。対象には、死刑確定者45人も含んでおり、『刑事訴訟法に定められた執行に対する異議申し立ての権利がきちんと行使できるようにしてほしい』という声が寄せられた」と記事は述べています。こういうアンケート集約データを第三者機関が行ったのは、これまでないと思います。今後の貴重なデータになるアンケートです。

このアンケート結果は、3月18日発行第6号と3月25日発行の第7号の小菅新聞で、2000人を越える収監者にも報告しています。(提言や今後の視察委の重点などは、まだ示されていない、アンケートの報告のみです。)

各地の視察委員会は、その刑事施設のある地域の「識者」、外部からの人材で構成されます。元警察関係者や住民代表、医者、弁護士などで、必ずしも拘留された者の人権に目を向けることができるとは限らないようですが、東拘視察委員会は条件・制約の中でよくやってきたと思います。

小菅新聞6号、7号に載ったアンケート集計結果によると、11月21日に2151人にアンケート用紙を配布し、25、26日に2137名から回収し、回収率は99.3%、うち回答率は87.4%。つまり、2137名中1868名が回答し、白紙が269枚。回答者の内訳は、①公判中、未決の人900人(うち女性47人)、②移送待ち(既決)552人(26人)、③東拘受刑者(既決)283人(13人)、④労役場留置(既決)30人(1人)、⑤受刑者(既決)以外の刑確定者(死刑確定者)45人、⑥その他58人(3人)。多くの意見のうち、公開で小菅新聞に載せるのは限られていますが、以下はアンケートの集約の一端です。

- ・ 食事
(ちょうど良い984人、多い181人、少ない58人、無回答45人)
- ・ 居室
(満足している745人、満足していない532人、どちらとも言えない548人、無回答43人)
- ・ 房内所持総量制限の枠外である裁判資料
(特に問題を感じない1307人、裁判資料として

所持を許される範囲が狭い180人、無回答381人)

- ・ 運動
(問題ない480人、問題がある1087人、どちらとも言えない261人、無回答40人)
- ・ 運動に問題があると答えた理由(複数回答可)
(単独の運動場が狭い390人、陽が当たらない590人、時間が短い307人、運動できる種目の範囲が限られている380人、その他384人、無回答5人)
- ・ 面会
(問題がない284人、問題がある1333人、どちらとも言えない185人、無回答66人)
- ・ 面会の問題の理由(複数回答可)
(面会時間が短い1108人、土、日にも面会したい1007人、面会時間を夜間にも入れてもらいたい547人、その他222人、無回答3人)
- ・ 手紙の発信(受刑既決以外への質問)
(問題がない183人、問題がある639人、どちらとも言えない92人、無回答89人)
- ・ 手紙の発信に問題があると答えた理由(複数回答可)
(1日に許可される通数少ない477人、土、日も発信したい430人、弁護士宛の手紙の検閲をやめてもらいたい291人、その他125人、無回答5人)
- ・ 医師の診察
(満足340人、不満305人、満足も不満もあった366人、無回答46人)
- ・ 診察に不満を持った理由(複数回答可)
(診察までの時間144人、訴えをよく聞いてくれなかった222人、十分な説明をしなかった242人、その他200人、無回答72人)
- ・ 診察に関する質問には看護師の看護や薬の処方などありますが、略します。)
- ・ 反則行為について
(反則行為のための調査を受けたことがある人160人(8.6%)で、調査が適正だったと答えた人33人、適正でなかったと答えた人54人、懲罰を受けたことがある人139人、懲罰を当然と思った人30人、不当だと思った人55人)
- ・ 不当だと思った理由は、懲罰の認定方法、懲罰の理由、調査方法、懲罰の内容などが挙げられています。
- ・ 職員の公平さ
(公平な職員が多い636人、不公平な職員が多い140人、両方居る938人、無回答154人)
- ・ 職員に望む、第1は公平さ、第2は話を聞いてほし

い、などです。

・視察委員会への希望・注文では、712名の人から意見が出されたとのこと。「その内容も委員会への希望・注文だけではなく、職員、洗濯、食事、入浴、差し入れ、自弁、面会、手紙、テレビ、ラジオ、図書、教育、作業、医療などについて、主に改善してほしいところをそれぞれ記載し、その内容も多岐にわたっています」とのことです。こうして視察委が得たアンケートの貴重な財産を、これからの東拘の改善のみならず、全国の刑事施設の視察委員会のあり方への刺激と改善としても活用してくれるよう願っています。

4月2日 ラジオから「桜満開！」目を閉じて見あげる独房花吹雪の中

桜は満開に咲き始めているらしい。でも、こちらはまだすごく寒い。それでも8時半前に運動房に行くと、君子蘭の鉢の花穂も色づいてきています。春はやつと辺境にも届いてきたようです。

中東では、イスラエルで3月31日に右派のネタニヤフ政権が発足したとのこと。新政権はリクード(議席27)のほか、右派の「イスラエル我が家」(議席15) シヤス(議席11)「ユダヤの家」(議席3)に、労働党(議席13)ユダヤ教連合(議席5)を加えた6党計74議席の連合政権です。

外相には、パレスチナ人の排斥追放を主張して票を伸ばした、ロシア移民を中心とした「イスラエル我が家」のリーベルマン党首。

内相には「エルサレム」を和平協議の対象にもさせないとする、「シヤス」ユダヤ教原理主義のイシャイ党首です。

また、前政権の国防相の労働党のバラク党首がガザ民族浄化に味をしめて、引きつづいて国防相のポストを受け持っています。

新政権は拡張主義の大イスラエル主義者たちの集まりです。ネタニヤフ首相は96年にも首相になりました。その際には、後にブッシュ政権の中核を担った「ネオコン」のリチャード・パールらがネタニヤフに提言した内容を政策としていました。

その提言は、オスロ合意に右から反対し、パレスチナに国家を認めず、PLO認知に反対し、「土地と平和の交換」に反対し、力による平和を主張していました。そして、アラファトと異なるパレスチナ指導者を養成し、イスラエルの安全を第一として、パレスチナ人居住の全域にイスラエル軍を展開できるようにすること

を主張していました。その提言の対米関係では、当時のクリントン政権に左右されない、イスラエル強国を目指し、まず、サダム・フセインを打倒し、シリア包囲によるイスラエルの安全を確立するという内容です。後にアメリカのブッシュ政権は同じ中東政策を強化して、やみくもにサダム・フセイン打倒で成果をあげようとしたわけです。何しろ同じメンバーのネオコンでしたから。

この提言に沿って、政権に就いたネタニヤフは、ユダヤ人入植地の拡大・暴力支配を繰り返してきました。このネタニヤフが再び政権につくことは、オルメルト政権がアッバス大統領を立てて進めてきた「和平プロセス」が完全に破綻することを意味しています。

4月1日、新政権のリーベルマン外相は、和平交渉の再開などを定めたオルメルト前政権とパレスチナの合意について、それらに縛られない、とすぐ表明しています。パレスチナ国家樹立に反対しているの、和平交渉は成立しない構造が作られています。

一方、パレスチナ全勢力による3月来のパレスチナ統一政府樹立に向けた話し合いも、難しい状況を脱していません。PLOの改革を問われながらファタハが改革を拒んできたためです。ハマスは、第一次インテイクファダの中から創設され、PLOの外で活動してきたので、PLOの歴史性は共にしていません。公正な全パレスチナ勢力の機関をPLOの外からPLOをも含めて創るべきだと考えてきました。

70年代、ヨルダンがパレスチナ人の代表権を奪奪する中で、「PLOが唯一合法的なパレスチナの代表である」と闘い続けてきたPLOは、国際的に認知されたパレスチナ解放と不可分の機関です。私たちが愛着があります。PFLPをはじめとする解放勢力はもつとそうです。

PFLPやファタハでも、カドゥーミPLO政治局長らは、PLO自身の改革によって全パレスチナ民族の正当で合法的代表として、PLOの地位を守るために、ハマスを統合していく機関に改革されるべきだと主張してきました。しかし、それは行われずに来ました。

アッバス議長らは、PLOのこれまでの決定を認めることを踏み絵として、ハマスを排除しようとしてきたからです。アッバス大統領は3月の統一に向けた話し合いに、またそうした発言を表明しました。すべてのPLOメンバー組織、つまり現在のPLOに属する組織も今後参加する組織も、また、パレスチナ和解のための統一政府の部分の担う組織も、2国家案による

解決、「オスロ合意」と和平プロセスの中で合意された他の合意事項をすべて承認しなければならない、と表明しました。この踏み絵は分裂を作り出すものに他なりません。90年代の「オスロ合意」によって、パレスチナ民族世論は今に至るまで分断されてきたからです。

PFLPは、このアッバス大統領声明に対して、次のように反論を述べています。

「PFLPは2国家解決をパレスチナ人民のための、または、パレスチナの大義のための最終ゴールということは承認していない。我々の戦略ゴールは全パレスチナ解放にある」と述べています。

「PFLPは、1967年のすべての被占領地にエルサレムを首都とするパレスチナ独立国家建設に同意している。そしてすべての難民が自分の故郷に帰ることに賛成している。それは全土解放の戦略的目標に向かった解放を導くためのものだ。

PFLPは2国家解決を最終目標とすることは認めていないし、PFLPは『オスロ合意』に合意していない。さらに、『オスロ合意』に基づいたピースプロセスと言われる『ロードマップ』や『アナポリス合意』なども認めていない」と、アッバスの声明に反論しています。

PLOを「オスロ合意」の枠に閉じ込め、ハマスを排除しようとするアッバスの試みは危険です。もし「オスロ合意」を分界線としてPLOの維持を図るならば、ハマスのみならずPFLPを含むPLOメンバー組織はなくなり、PLOはさらに機能不全となるか、新しいPLOを作ろうとする動きが出てくるでしょう。

ハマスはPLOのファタハ独裁に、PLOの外での全土解放戦略の闘いを維持してきました。こうしたパレスチナ解放勢力内の問題は、アッバスがアラブ親米政権やアメリカやEUをバックに、これまでのように和平を進めることを難しくするでしょう。



これまでのオルメルト政権と演じてきた実のないアドバルーンだけの「和平会議」自身がイスラエルからも、またパレスチナからも問われているのです。それに、すでにアッバス大統領の正式な任期は、本来1月に終わっています。彼はアラファトとファタハの遺産にしがみつき、パレスチナを厳しい現実と直面させてきました。イスラエルに対して、和平どころか、何よりもガザの封鎖を解かせること、これが大統領による最低のイスラエルやエジプトに対する交渉でしょう。それをやっこないまま、ガザ支援国際会議だとか、ハマスを追い落とすことばかりに力を入れて権力維持しているように思えます。

オバマ政権はリブニ政権の下で、アッバスを取り込んで、ハマスを叩く国際会議的なこれまでのやり方を踏襲しようとしても、その形式すらなくなっているので、シリアトラックなどで和平の弾みをつけながら、ユダヤシオニスト内部の調整を待たざるを得ません。

山田さんから白胡蝶蘭に赤いタオルなどの差し入れ、ありがとう。赤いタオルは元気になるとか。

また、ブント時代の先輩の面会の時差し入れてくれた資料が入りました。ありがとうございます。難しい論文などこれから読みます。

午後、姉の面会。街は桜があちこちに美しいらしい。桜満開の様子や母の墓参りのこと、また、家族の伝言で、時間切れです。ありがとう！

夕方、速達でTさんの手術は成功し、順調とのこと知りました。やっぱり成功していました。良かったです。

4月3日 フランスの獄より便り女性の日

祝して語るインレボリューション

満開、晴天の美しい日。ルーバーの隙間から回廊の外の桜を見るけど花は見えない。蕾なら遠くで見えないので、白く咲かないと……、と思っていたら、午後今日の晴天につられたように白い花が咲いています。もう3分咲きくらいでしょうか。

独房の狭い行き止まりに、はめ殺しのアクリルの窓があります。その向こう側は、1メートル幅の回廊になっていて、回廊の向こうが壁です。壁は独房を暗くしないために針金入りの厚いすりガラス。その上下にルーバーが施してあります。房内から回廊を挟んで下向きのルーバーの隙間は、一番広いところで、1センチくらい。そこから桜が見えます。遠目に見える範囲が狭いために、たくさん咲かないとこちらの目には届

かないようです。でもちょうど咲いているなど確認しました。

3時半過ぎに、大学時代の先輩と面会。資料の差し入れなどありがとうございます。今、ちょうど、アラブ映画週間をやっているとのことで、この後鑑賞に行ってみるとのこと。いつもあれこれとお世話になりっぱなしです。「土地の日集会」は65人くらいの参加者で、有意義な会だったようです。全体の席を円形に配置して、講師対聴衆でなく、それぞれに語れてよかったとのこと。檻(Cage)という映画上映の後、藤田進さんが「占領という根本問題」について講演し、その後、質疑討論会。新しい人も10人くらい参加されていたようです。

夕方、ちょうどフランスに収監中のカルロスから、3月8日の女性の日に送ってくれたメッセージが届きました。欧州・東欧では、この3月8日にはミモザの花で女性の同権を訴えてデモをします。また、他の組織の友人たちからこの日にはよく花をもらったものです。カルロスも裁判の証言で交流以来、3月8日や4月17日のパレスチナ獄中者の日、12月のPFLP創立記念や新年などに挨拶を送ってきます。

今回は、3・8女性の日の挨拶と共に、カルロスからオバマアメリカ大統領あてのオープンレターのコピーが同封されていました。こんな風な要旨です。

「バラク・フセイン・オバマアメリカ合衆国大統領：CIAの秘密の監獄を閉じると決めたあなたの決断に敬意を表する。

我が同志スイス市民のブルーノ・ブルグェットはNATO海軍にサポートされたアメリカの特別作戦によって、イタリアとギリシャの間のフェリーボートから1995年11月11日に拉致された。我々が非公式に得た情報によると、ブルーノは南ハンガリーのアメリカの基地で尋問中に事故死したということだ。

もし、ブルーノが本当に死んだのなら、彼の家族、親類、友人、同志たちがスイスで哀悼するために、そして、パレスチナの大義の英雄であるブルーノの永遠の魂が天国の我らの殉教者たちに加わるために、我々は彼の遺体の返還を求める。(中略)

グアンタナモ基地にこびりついた醜聞を消し去るために、占領したその地を正当な持ち主に返しなさい。すなわち、革命の50周年を迎えるキューバ人民に。私は全能の神に祈る。いつか最終的に自由を得た大陸の人民が一つの声で、「God bless America!」と叫ぶことを。そして、それはあなたの祖父が「アッラーアクバル(神は偉大なり)」と言うように。革命の名にお

いて、カルロス」といった内容のオープンレターです。

90年代は多くの友人たちがアメリカの拉致の被害にあいました。ソ連・東欧崩壊後、イスラエルとアメリカは組んで、国家テロの道具として、東欧の情報機関の記録や資料を駆使していました。

また、ソ連・東欧の崩壊した世界では、押し留める力が弱い中で、イスラエルは暗殺専門、米CIAは、あちこちに秘密の基地を作って拷問尋問を繰り返しました。何人ものPLOの友人たち、ことに保安情報機関の人々が殺されました。

ブルーノのケースもその一つだし、また96年にネパールで鍼灸活動中の城崎勉さんがFBIに拉致されたケースもそうです。彼は日本赤軍のメンバーではありませんでした。しかし、FBIは「米施設を攻撃した」との冤罪の口実で城崎さんを拉致し、その後米本土での一方的な判決で30年の刑を科しました。他にも、ある日行方不明のケースもいくつかあり、その行方が知れないままでした。

あまりにも不正義と力の支配が許されていたポスト冷戦以降、その生きすぎは自らを破産させました。しかし、力の支配と金融ゲームの破産の上に新しい希望はまだ大きくは育っていません。これから各地の人々の主導性を持ちたいものです。日本からも……!

でも日本では定額給付金や、高速道路料金値下げ、さらには巨大な補正予算で飾り立て、本質隠しの大盤振る舞いの施策の前で、麻生支持率が上向きだとのこと。反自民の側は息切れしてきたのでしょうか。検察を問わず追及の矛先を小沢氏に向けるマスコミの論調が作用しているように思います。

でも変革へ! まず政権交代を。

4月4日 ルーバーの隙間の桜三分から

一挙に満開友の無事知る

今日は週末なのに速達が3通と他に手紙も2通届きました。その中に、関西のHさんから手術したTさんと一緒に取った写真に一首添えられていて、元気な様子を知りました。いい顔です。

君を抱くただ君を抱く君不在 君居ぬ世界我は拒否せり

後は私も医者に言われたことですが、一日一日が薬、時間の経つことが、治していく力になります。食道と胃の摘出の詳しい症状、度合いは分かりませんが、手術前の便りでは、「入院中にこれは与えられた絶好の機会ととらえ、これからの闘いのあり方、陣形の作り方

などを根本から考え直してみたいとも考えています。再度の失敗を繰り返さないために、60年代、70年代の闘いの継続を果たしえなかった私たちの責任は重たいと考えています。決して背伸びせず、できる役割があるとしたら何かを考えよう」とありました。

関西にはなくてはならない人、回復を祈ります。

ちょうど届いた歌人からも病氣見舞いと添削のお便り。その中で、共通の友人Tさんの病氣も心配しています。新学期、歌人もまた教授です。新学期は新しい若者との授業が楽しそうです。「男子は今ひとつもろい。調子いいけど女子がごりっとしていて楽しい」とのこと。やっぱり女性の味方ですね。

昔の友人の便り。この友人は、よど号事件のことをこんな風に書いています。

「今日はよど号HJ39年記念です。良くぞピョンヤンへ行き着いたものです。『北で金日成をオルグして武装訓練をして、翌年帰国して武装蜂起する。密かに帰国して、国内メンバーと合流する時のサインは、新聞広告欄に〇〇〇など決めた広告を出す』というのは、ほとんど病氣のようであるが、真剣。広告欄のことで、当時は議論になった。～」とありました。

そうでしたか。私は後にアラブ行き、国際部でしたが、何の連絡方法も存在していないと聞いていました。ずいぶん一方的で、ローカルな連絡方法だな……と当時を思い出して笑えます。

読みながら、ちょうど「土地の日」の3月30日に始まった1970年のよど号ハイジャックから、もう39年でしたか……と思い出しました。あの時日比谷野音で、4月1日大衆路線の政治集会を大々的にやる予定をしていました。よど号の飛行機は、ちょうどその頃金浦空港に対峙して、みな喝采を送り、全国から続々と4月1日に向けて上京してきました。

ところが、権力側はこの合法的な政治集会の許可を取り消しました。権力はやばくなったら法律無視でどんなことでも過剰反応するものだ、当時しみじみ思ったものです。よど号事件以降から弾圧が格段にひどくなった当時を思い出しました。

夕方、ルーバーの隙間から見ると、晴天と温度の高さのためか三分咲きくらいと思っていた桜が、いつの間にか一挙に満開。Tさんの無事の便りを読んで、目を上げたら満開です。いい夕方になりました。

4月6日 花筏ためらい揺れて意を決し

流れ行くさま人生のごとく

桜日和です。きっと東京中の桜は満開では?!と思

うくらいよい日和です。運動房に出ると、東拘の中央棟のヘリポートの上の空は真っ青です。菜の花に代わって、朱に色づいた君子蘭がみごとに蕾を開かせ始めました。土・日の後のプランターはいつもぐんと成長しています。

運動房から戻ってすぐ友人の面会。去年は反貧困ブレカリアートの現場交流で走り回って疲れていたようですが、体力精神力も取り戻したと元気で若々しい。これからの運動のこと、キューバ革命の50年に4月下旬から出かけるとのこと。フットワーク、フィールドワークがいい友人です。いいなあ……キューバのみならず、ラテンアメリカの明るく革命大好きなコンチネンタルの人々とたくさん交流してください!と、うれしくなりました。ラテンアメリカの友人たちが目に浮かぶようです。

この間、北朝鮮の人工衛星発射予告に対して、ここぞとばかり北を利用して危機意識をあおり、国防意識へ誘導し、麻生政権のポイントにしようとして躍起になっていました。異常な臨戦態勢をわざわざ広報していたのに、4日は麻生政権のドタバタに終わったようです。

昨日の新聞では「北朝鮮ミサイル『発射』誤報2回 防衛省情報伝達ミス」とのこと。このようにもあそぶような政治は危険で滑稽です。米、中、ロなど発射時刻まで知らせを受けていても、日本のように騒ぎ立てていません。

日本政府の取るべきは、本当のところを静かに分析し、何の危険も被害もないと国民に伝達するのが役割でしょう。北は国威発揚の国内向けの人工衛星発射以上ではないでしょうし、日本の権力も米、中、ロ同様知っているはず。それを自民党政権支持率アップに騒ぎすぎです。こうした滑稽な騒ぎは格好ばかり。このスタイルで突き進まざるを得ず、または、それを好み、安保理への提訴から対決を強めるばかりです。

相互作用で、北は北で、六者協議に価値を見出しえず、再度の核開発に乗り出す道を探らざるを得ない関係に動くでしょう。

ちょうどオバマ大統領は4月4日、NATO首脳会議を経て、核のない世界「核廃絶」への具体的な演説を5日プラハの大群衆の前で行いました。この日、北の人工衛星の打ち上げがありました。すでに共和党のブレーンだったキッシンジャーら米国の権力、資本家中枢は、商売にも人類にも最早利益はないと核廃絶を決めています。

その分、オバマ演説も「核を使用した唯一の核保有

国としての道義的責任」に言及し、核独占のシステムをやめて、核軍縮に向けて進めるそうです。もちろん、アメリカの核独占のもとで。

アメリカ政府は道義的責任を言うならば、オバマ大統領は、まず、広島、長崎に来て、核軍縮の決意を示し、謝罪し、実践すべきでしょう。そしてまた、核独占のもとで核軍縮する方法から、最後にはなく、最初に核を放棄廃絶する道を探る必要があります。オバマ政権は、ブッシュの「力の支配」から支配の方法を変えて、「協調」を重視し、地域当事国の関与を通して、米のイニシヤチブを実現する道に動き出しています。ミサイル迎撃を騒ぎ立てるのではなく、日本こそ、核軍縮廃絶の道筋を育てる役割をこそ負うべきでしょう。

4月7日 ジャカラランタ空にきらめくエメラルド

朝日を浴びて地中海の道

起床のチャイム前から青空と陽がルーバーの隙間から分かります。点呼の後、「敷き布団乾燥!」の声。食後に敷き布団を集めて陽に干します。旧舎の時には、10日に一度くらいの割でしたが、新舎になってからは2ヶ月に一度くらい。干し場が足りないのだそうです。2000人以上の収容者の布団を天気の良い日に干すには、旧舎のようにそれぞれ庭に干せる条件がないようです。ついでに、枕カバー布団カバーを洗濯しました。

今日の運動は空に見えるベランダの房へ。棟の陰のベランダで、一向に陽は当たりません。青い空を見ながら爪切りです。

今頃、ペイルートはジャカラランタが紫の花を一杯咲かせているだろうなあ。もう、アーモンドの実実は屋台を押して売られているだろうか。もっと後かな……。ガザの後のパレスチナの統一政府の話し合いは、どうなっただろうかと考えつつ。

午後は旧友の面会。癌のことを良く分かる知識の深い友人です。副作用はないかなど心配して免疫力を高めるようにとアドバイスしてくれているうちに、もう「時間です」とのこと。いつもありがとう。共通の友人の話をしつれたり、心残り、慌てて手紙を書いています。

分子生物学者の福岡伸一著の「動的平衡」と「できそこないの男たち」を差し入れてくれたので、読んでみました。面白い。生命はどう宿るか、人間の成り立ちは機械論的なパーツではないことを様々な切り口から述べています。コラーゲンを摂取すれば、コラーゲ

ンが増えるわけではないし、グルタミン酸ソーダを食べれば「頭が良くなる」わけでもないし、現在の飲食やダイエットのあり方など、一般社会の話を取り取りながら、命の成り立ちを語っています。文章も巧みで、エピソード豊富で、分かりやすく面白い。ベストセラーという理由が分かるものです。

生命活動は、突き詰めれば、たんぱく質の合成と分解との同時に行われる動的な平衡状態であり。それが「生きる」ということであり、生命とはそのバランスの上に成り立つ、効果であるということです。

「合成と分解との平衡状態を保つことによるのみ、生命は環境に適応するよう自分自身の状態を調節することができる。これはまさに『生きている』ということと同義語である」というところから「動的平衡」つまり「生きている」ということをタイトルとしている本です。

私が一番気に入ったのは、「人間は考える管である」というところ。「そもそも、私たちの遠い遠い祖先は、現在のミミズやナメクジのような存在だった。彼らの姿こそが、私たちの原型なのである。彼はまさに一本の管。口と肛門があり、その間を中空のチューブが貫いている。(中略)彼らは人間の消化管と同じように、緻密な蠕動運動を行って食べ物を消化、吸収し、様々な反応を行い環境に適応して生きている。……これらの生命活動は、消化管に沿って分布する神経ネットワークによってコントロールされている。もし彼らに『君の心はどこにあるの?』と訊ねることができ、その答えを何らかの方法で私たちが感知することができたとすれば、彼らはきっと自分の消化管を指すことだろう。

(中略) 私たちはもっぱら自分の思惟は脳にあり、脳がすべてコントロールし、あらゆるリアルな感覚とバーチャルな幻想を作り出しているように思っているけど、それは実証されたものではない。……私たちは、ひょっとするとこの管で考えているかもしれないのである。極言すれば、私たちは一度かつてダーウィンがそうしたように、ミミズのあり方をじっくり観察した方がいい。そしてもう少し謙虚になるべきなのだ。私たちはたとえ進化の歴史が何億年経過しようとも、中空の管でしかないのだから」と述べています。

なるほど、口から肛門へと抜ける中空の管が脳と同じように考える管なら面白いな。私の大腸も小腸も考えたりして、使いすぎて、ストレスで癌に突然変化したのかもしれない。それを摘出したことで、どんな生き方になるのだろうか。(生まれ変わったのだという友人もいます。)

そんなことを考えつつ楽しく読みました。

もう一冊の方、「できそこないの男たち」は、生物はすべて女性（フィメール、メス）で自己完結していたものであり、そこから派生して男性が生まれてくることを様々な角度から教えてくれるものです。アダムがイブを作ったのではなく、「イブが後になってアダムを作り出したのだ。自分たちのために」であり、ポーボワールの「人は女に生まれたのではない、女になるのだ」よりも、「人は男に生まれたのではない。男になるのだ」が、人類や動物の身体的痕跡の歴史から解き明かして、証明しています。

この本も、タイトル・内容共に、生物を学ぶ良い本と言えます。また、この著者が週刊誌の「私のおきの京都」というグラビアの中で、京大西部講堂をあげて、オリオン三ツ星を誇りのようにその中で記述していたのを読んでいたのを思い出して、読みました。

「人間は考える管である」この「動的平衡」の本は、管である胃と食道の癌の手術をしたばかりのTさんに読んでもらうために送りましょう。

4月8日 花御堂しだれ桜の舞う境内

甘茶に濡れる釈迦が泣いている

今日は花祭りです。世田谷時代の近所の豪徳寺の花祭りを思い出します。近頃は花御堂を出して甘茶をかけた甘茶を配ったりしないのかも知れませんが。子どもの頃、甘茶をかけられるお釈迦さんがかわいそうだったものです。

朝から採血検尿。午後は歯科治療。歯茎が腫れたので、抗生物質を飲んで良いか？。抗癌剤と一緒に構わないのか？ 尋ねたところ問題ないとのことでした。

渡辺弁護士と面会。ちょうど先生は事務所を移られて、新しいアドレスになったことなどを確認したりしました。

友人から「情況」の和光さんの「日本赤軍とはなんだったのか」の文のひどさにあれこれ心配する便りが届きました。

「和光の物語りは事実がデタラメ。本人は意図的なのか思い込みなのか？ 反論して事実をただした方が良い」という便り。また「和光も和光だが、それよりも編集長の見識と常識を疑う。編集部では、和光は男を下げたと言ってるらしいが、男を下げたのは編集長だろう」というのもありました。「言い募る事実から和光の意図しない実情が見えて、逆にあなたの大変さが

分かる」という励ましなど、様々です。

私は「どうも私は和光さんの頭の中にでんとあぐらをかいて座っているようです。当時言ってくれたら、改造の余地があったかもしれませんが、ヤンキー娘とか私情私恨を並べられても、ゴシップの類になってしまいます。一緒に闘い得なかった結果として、その思いを呑み込んで行こうと思っています」などと返事を書いているところです。

リッダ闘争や丸岡さんのことなど、あまりに歪曲されています。公判にも出てきていましたが、73年来のハバシユ会議の合意から、PFLPからの独立のために、もともと計画された会議を和光さんの提案で会議になったとか、自分の思い込みの物語が続いています。当時はニコニコ一緒に苦勞を共にしたはずの和光さんの頭の中で、そんなストーリーに捻じ曲がっていたのか——と驚くことばかりです。

私の側からも書くことがあるかもしれません。でも、やはり未来に開かれたベクトルで書きたいですね。

4月9日 吾子来るテレビ化粧のままの顔

帰国8年目の桜を語る

メイの面会。ちょうど桜が満開から吹雪のように散っているらしい。桜の満開の4月3日、みどりとメイが帰国してから8年経ったね、と話しをしました。メイも忙しく、ちょうどアラブの方のTVのレポーターの仕事は、桜の紹介、日本アニメの紹介など、多忙続きだったようです。明日からパケーションとか。8年の日本生活を経て、自分の立ち位置、社会参加のあり方を彼女なりに決めているようです。私の方が現代日本は教えられるばかりです。

先月の杉の香りの香水の名は、「シゲノブ トワイライト」というもの。「長い間レバノンに亡命していた日本赤軍創設者の重信房子からのイメージ。大阪で逮捕されて、パーティ（党）はなくなっても香りは残った」ということらしい。ネットのそんな記事を送ってもらったので、メイともその話をしようとして、忘れてしまいました。今は売り切れだそうです。アメリカ製、100ドルですって。高い！（「オリブの樹」87号でも触れた香水です。）

4月10日 ルピナスにサンダーソニアの花届く

批判の文を書いてみようか

東拘の庭に、やっとなんぽがポツポツと咲きました。いつもは3月から咲き出すのに、今年は桜より後になりました。それに工事でコンクリートに固めてし

まい、庭といっても建物の端っこなどの土のところに少しだけです。

今日は「創」5月号が届きました。「創」編集長から癌治療の手記を書くように求められましたが、結局、編集部の方で「オリブの樹」86・87号からまとめてくれました。後半に現状を何十行かを書いてほしいとのことで、締め切り間際に書き送りました。「創」の文章には、「これは『オリブの樹』のまとめですよ」と書いてもらえば良かったです。短歌などもまとめの中に入っていたので、癌手術手記の割りに、のんきな感じになってしまいました。まあ、全然悲壮ではなかったのは事実ですけど。

4月に大阪で予定していた会えなかった友人たちが面会に来てくれる予定です。We shall over come を大阪の医療刑務所で歌ってくれるために練習しています。ど書いていた仲間たちとも、東拘で来週会う予定です。春、いろいろなチャレンジが友人たちから伝えられています。私のチャレンジも抗癌剤を飲みながら、あれもこれもと描いています。

判決も近づいて来るでしょう。心配しましたが、今のところ副作用なく回復しています。この貴重な時間を前向きに楽しく、そして有意義にと思っています。

4月22日追記

もう「オリブの樹」は締め切りしましたか？ 一言追記します。今日診察があり、腫瘍マーカーが上がってしまっていたことを知らされました。3月に聞いた時（これは2月26日の採血データ）、CEA 21.2でしたが、4月8日採血の分のCEAは、27.4。他の、CA 99というのが、43から73に上昇とのこと。5月連休明けに、また、採血し、それでも上昇なら、内視鏡検査をまたやるとのことです。そうか、そんな簡単に癌は治らないのか。でも、数値に一喜一憂はしないで、判決までの短い時間を大切に過ごそうと思います。よい5月を！ 22日記

お詫びと訂正

第87号の誤植をお詫びして訂正します。
3頁 右から6行 大儀の名で→大義の名で
5頁左 19行 刑務官が着て→刑務官が来て
6頁左 4行 医務部長が継げ→医務部長が告げ
9頁右 下から21行 クーデターを測った
→クーデターを図った
13頁左 13行 元警視庁長官→元警察庁長官

重信さんとの交流コーナー 差別者の欧米

辻 邦

■大統領の勇氣ある発言

4月20日からスイス・ジュネーブで開かれている国連世界人種差別撤廃会議〔ダーバン2〕におけるアフマディーネジャード・イラン大統領の発言が、波紋を呼んでいる。

同大統領が会議冒頭の演説の中で、イスラエルを“completely racist government”＝「完全な人種差別主義者の政府」と批判したことから、会議直前に不参加を決めた米国に倣うかのように、フランス、フィンランド、デンマーク、英国、スペインなど欧州各国を中心とする複数の代表団が退席したという。また潘基文国連事務総長は、会議を「糾弾と分断、扇動」に利用したとアフマディーネジャード大統領を批判。同大統領の演説が「会議目標と逆行し、現実的な差別問題の建設的解決方法の構築が大幅に難しくなる」と述べたという。米国のウォルフ副国連大使は、同大統

領の演説が「恥ずべきで不愉快、扇動的」だとして、潘事務総長の意見に同意を表明。ブラウン英国首相も同様に非難し、クシュネル・フランス外相は、アフマディーネジャード大統領が会議で不快(?)な発言をした場合、他の欧州各国と一緒に退席するよう代表団に指示していたことを明らかにしたという。さらに、ハーパー・カナダ首相は、同大統領の立場に反対の声を上げるのは「非常に良いこと」だと述べ、核開発のほか、イスラエルとその住民をイランが脅かし続けていることが大きな問題だと発言したという。

これら欧米諸国政府の要人たちの発言を聞くとき、彼らの中にある二重基準の強烈さと矛盾の激しさに、しばし唖然とさせられてしまう。

アフマディーネジャード大統領の発言を、何の先入観をも持たずに素直に読めば、それがいかに筋の通った趣旨のものであるかは明白だ。彼はこう発言してい

る。

“After the Second World War, by exploiting the holocaust and under the pretext of protecting the Jews they made a nation homeless with military expeditions and invasion. They transferred various groups of people from America, Europe and other countries to this land. They established a completely racist government in the occupied Palestinian territories. And in fact, under the pretext of making up for damages resulting from racism in Europe, they established the most aggressive, racist country in another territory, i.e. Palestine.”

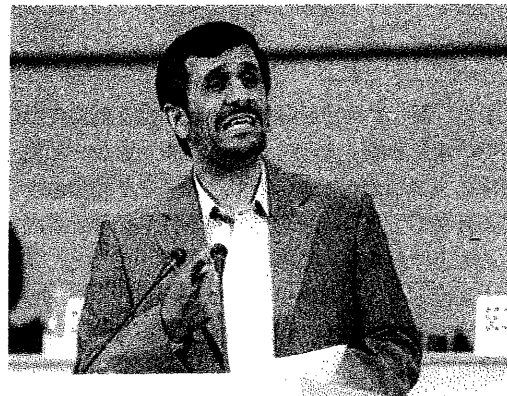
「(欧米の)人種差別主義者は、第二次世界大戦の後、ホロコーストを悪用することによって、ユダヤ人を保護する口実の下、一国民=パレスチナ人を流浪に追い込みました。彼らは、アメリカ、ヨーロッパその他の国から、この土地へといろいろな人々を移住させました。彼らは、占領されたパレスチナの領土で完全な人種差別主義者の政府を創り出しました。そして、実際、ヨーロッパにおける人種差別主義から生じた損害を償うという口実の下、彼らは別の場所、すなわちパレスチナにおいて、最も攻撃的な人種差別主義者の国家を樹立したのです」

アフマディーネジャード大統領の発言のどこに偽りがあるというのか？ どこが誤っているのか？ 彼の主張は極めてまっとうであり、非の打ち所がないものだ。

■欧米首脳の偽善

アフマディーネジャード大統領とは対照的に、欧米首脳と言動は偽善の香りに包まれている。イスラエルのパトロンである米国・国連副大使ウォルフのそれは問題外としても、フランスやイギリス、カナダ等の首脳発言には呆れかえるとしか言いようがない。また、ガザ攻撃の際に国連施設を何度も攻撃されながら、恥ずかしげもなくイスラエル擁護に回った国連事務総長・潘の姿は哀れでさえある。

先のガザ攻撃とパレスチナ人虐殺を見れば、イスラエルの一連の政策全て——軍事も民政も——が人種差別に基づいていることなど明白だ。シオニストはパレスチナ人を対等な人間と見做していないからこそ、土地を奪い、家屋をブルドーザーでなぎ倒し、市街地に白リン爆弾を投下し、面白半分にはパレスチナ人の子どもたちを射殺し、無差別爆撃を行なうことができるのだ。自分たちが殺そうとする相手にも家族があり、妻



NEW CONFERENCE - GENEVA 2002

や子、父や母、祖父や祖母がいるということに想いが及ぶなら、そうした残虐行為を平然と行なうことができるはずがない。自らに比べて劣った存在であると認識しているからこそ、パレスチナ人を残酷に扱って何ら恥じないのだ。これこそ、まさに人種差別に基づく蛮行であると断言できよう。

欧米諸国の首脳たちは、バカのつづえのように「イスラエルには自衛する権利がある」と口にする。確かに自衛の権利はあるのだろう。だが自衛はイスラエルの専売特許ではない。パレスチナ人にも当然認められるべきはずのものだ。しかしそれがイスラエル及びシオニストにのみふさわしく、パレスチナ人には認められないというのなら、それこそ人種差別主義そのものだ。

アフマディーネジャード大統領の演説は、過去二度に渡って帝国主義勢力の手で行なわれた世界大戦の愚行を非難し、アメリカや一部欧州諸国がシオニストによるパレスチナ人虐殺をサポートしていると指摘し、さらにはアメリカとその同盟国によるアフガニスタン攻撃やイラク攻撃をも鋭く批判している。おそらくは、彼のイスラエル批判のみならず、こうした欧米諸国の恥ずべき負の歴史と人道に対する凶悪な犯罪行為を想起させたことが、欧米諸国代表の会議がイコットと退席の原因となったに違いない。

それにしても、欧米諸国首脳の偽善的発言に比べると、占領地を訪れてパレスチナ人に対するイスラエルの行為を目にし、「(それらは)南アフリカでアパルトヘイトの白人政権が様々な段階で行なってきた行為の上を行くものだ」と糾弾したデズモンド・ツツ大主教の発言は、何と高貴で真実に満ちていることか。

ユセフ檜森さんのこと

重信 房子

注：これは2002年、檜森孝雄さんが3月30日パレスチナの土地の日に自決された後の2002年4月に書かれた文章です。(編集室)

1. エプリル・フールの日に

その日は、エプリル・フールの4月1日だった。午前中の大谷弁護士との面会の知らせを受けて、なんだか胸が騒ぎ、泡だった。

予定外に弁護士が訪れて来て、良い話がこれまでなかったという経験のせいかもしれない。

葉桜の中にまだ相当の桜花を残した桜の老木を見やりながら、面会室へと急いだ。

面会室のドアを開けた出会いに頭に、「あなたにとって良いニュースではないんだけど……」と大谷弁護士は前置きを述べると、檜森さんが、3月30日、「パレスチナの土地の日」に、日比谷公園の「かもめの噴水」の脇で、焼身自殺を遂げたと一気に告げた。(檜森さんとは、1971年に中東を訪れ、PFLP ボランティア戦士として「リッダ作戦」に参加した日本人3人と、当時行動を共にしていた人で、パレスチナ連帯を今も続けていた人だ。)

私はただ呆然と聞き、涙の余裕すらなかった。「焼身自殺」「パレスチナの土地の日」という言葉が耳に残り、「ああ、彼はやってしまった……」という思いにとらわれた。

これは、絶望の「自殺」ではなく、パレスチナに連帯し、イスラエルに抗議し、そして殉教者の列に自らを整列させるために、彼はやってしまった……と思った。彼が最も愛し、志を分かちがたく結んだ仲間たち、パレスチナ解放の一環として30年前「リッダ空港襲撃作戦」で自決した戦士たちの列に自ら加わることを。きっといつも望んでいた彼にとって、それは必然の行為だったのかもしれない。

30年前の1972年5月30日、アラブ—イスラエル戦争の中にボランティアの義勇軍兵士としてリッダ空港襲撃作戦に参加した人々と行動していた彼。アラブ名でユセフと呼ばれていた檜森孝雄。「リッダ作戦」の30年前の戦争の中に今も身をおきながら、他者を殺す以外の方法とは、自己を殺すことによって、日本からパレスチナに連帯し、その殉教者の列に加わ

るより方法がないと思い定めて逝ったのだろうか。檜森さんが死を決した3月30日、パレスチナでは「土地の日」と呼ばれている。1948年の第一次中東戦争によって、イスラエルに占領されたガリリー地方のパレスチナ人50万人が、1976年一時的に定められた土地収用法によるイスラエルの土地の強奪に抵抗して一斉ゼネストに立ち上がった。この土地を守り、抵抗し、殺されながら闘った3月30日を記念して、「土地の日」と名付けられた。パレスチナ抵抗運動のシンボルの日である。

2002年の「土地の日」は、前日からのイスラエル・シャロン政権による自治政府議長府施設、アラファト執務室に至る銃撃と破壊によって、和平は瀕死の状況に追い込まれていた。

シャロンは、首相になる前から、和平そのものに反対し、オスロ合意も自治もつぼつつもりでいた。2年に及ぶ騒乱の原因となるイスラム聖地への武装力を率いた侵入は、シャロンによって引き起こされ、これまでの慣例を破壊する挑発行為として、戦乱の引き金となった。それ以降、シャロンが2001年首相になると、国家政策による暗殺の実行によって、戦乱はますます非和解的なものになった。PFLPのアブ・アリ・ムスタファ議長も、このシャロンの国家攻撃によって、2001年8月27日ミサイル攻撃で暗殺された。さらにシャロン政権は、去年の9月11日のアメリカ中核に対する無差別攻撃を利用し、パレスチナ自治政府を「テロ支援団体だ」と規定し、2001年12月から、自治政府そのものの破壊に乗り出していた。

そして3月29日には、議長府への攻撃へとエスカレートした。アラファト議長は、3月30日の土地の日、「エルサレムに、パレスチナの旗を掲げるまで闘う」と自らが殉教者として闘うことを宣言した。

この騒々されるパレスチナのそのニュースをちょうど受けて立つように彼は自決した。被占領地パレスチナの惨状とちがって、彼が自らに火を放った場所は日本。満開の桜が散りはじめた日比谷公園の、最も美しい桜吹雪の時節に、彼は決死し、桜見の人がそのどかな花の中で燃える人間の炎を通報したという。

その場所は、彼が去年9月、仲間たちと共に、やはりパレスチナでイスラエルの虐殺行為や、PFLP議

長の暗殺に抗議して、ハンガーストライキを行った場所だったという。檜森さんは、桜吹雪に乗って、30年前に殉教した親友たちの居る彼岸に旅立った。

自らの命に火を放った時、桜吹雪は彼をきつとあのローマ遺跡の町パールベックに連れて行ったのだろう。アラブの地で、桃と杏の樹の下で誓い合った30年前の志と時空を越えて一体化していたのだろうか。

「姓名を異にするとすえども、兄弟の契りを結び、心をついに力を合わせ、困苦にある者を救い、同年同月に生まれること叶わざるも、願わくば同年同月に死せん。」まだ夏の残るアラブの10月、台地に熟れ残った桃のなる樹の下で、地酒を酌み交わしながら、オリブも一緒に桃園の誓いを交わしたという。その志を持って、まだ早春にも早い同じ台地の樹の下で、檜森さんの日本帰国のためにはなむけの宴を設けたと、30年前に「リッダ作戦」で戦死したパーシム奥平から聞いたことを思い出した。

多分、その時から、アラブで殉教者となった人々と一体化し、不可分に生きることを決めたのだろう。多分、あの時から、自分だけが幸せを過分に味わうべきではないと定め、衣・食・住において、また、愛情においても、自分なりの節度で生きてきたのではないだろうか。

ユセフ檜森、あなたが帰国した後、いくつかの出来事があった。ユセフも忘れないだろう。水死したオリブ（山田修さん）に別れを告げに、ビジョン・ロックの見える海辺に皆で行った時のこと。ラーメン好きだったというオリブのために、日本食品店で、私が奮発して買ったインスタントラーメンをパーシム奥平がほぐしながら、海に向かって投げた日のこと。あの時もユセフは帰国しないと拒んでいた。オリブが死んだ時から、ユセフがオリブの遺体に付き添って日本に帰ると、もうそれは何度も話し合っただけで決めたことなのに。ユセフはすでにパレスチナ（イスラエル）に調査に入っていたので、闘いの原型を推し量り、自分が決死部隊に入ることを主張していたのだろう。それは今よく分かる。オリブの水死の説明のためにも、また、闘いの継承のためにも、帰国を指示されて、ユセフは納得しがたいようだった。

「必要なら、また来ればよいのだから」と、私もパーシムの意見を支持して帰国を主張した。でも、ユセフは、「また来れる」という希望は叶わないと思っていたのだろう。オリブの付き添いと他の仲間をアラブに送る役割の仕事を負って、ユセフは帰国した。

そして、ニザール（丸岡修さん）が、4月に訪れた。レバノンには花盛りのいい季節の4月。ベカー草原も南部戦場まで、花畑が連なって、黄、赤、紫の花が咲き乱れる、そんな4月。

待ち合わせたパーシム奥平とサラハ安田は、もう陽焼けした顔で現れた。小さな道端の店の低い椅子に座って、アラビックコーヒーを飲みながら、パーシムは「ユセフを呼び戻そうと思う」と言った。ユセフ、あなたが聞いたか一言。「ニザールは若いのに、骨のある奴だ。彼なら帰ってユセフと交代してもいい。ニザールを決死作戦に誘ったら、“自分は今、日本で闘うため帰国する条件で訓練に来ている。日本人民のために今命を捧げる覚悟はあっても、パレスチナのために今自分は命を捧げる準備はできていないし、そのような話として、檜森から聞いていない”ときっぱり断られた。俺は彼に詫言たよ」と、パーシムはニザールの素直さを高く買っていた。横からサラハが「いやあ、ユセフの奴自分が交代したいから、帰国の条件まで確認して、ニザールを送り出したんじゃないかなあ……」いつものサラハの語り口に笑いがあった。

「退路を断った闘い」の思いを、もう私も知った後だったので、この時間聞いてしまった。「決死作戦はどうしても3人なの？ 1人ではだめなの？」パーシムもサラハも困った顔で大きく頷くので、私も黙ってしまった。

こうしてユセフが再びアラブに来ることになった。でも、PFLPはベイルートで水死した人物たちが「イスラエル」に入国していた者たちであると判るのは時間の問題と、作戦を急いだのだろう。

また、よど号の赤軍派の仲間とコンタクトする役割と訓練で訪れたアハマッド（岡本公三さん）が作戦参加に同意したために、ユセフの交代は見送られたらしい。オリブの付き添いで帰国する時、パーシムと一緒にユセフの帰国を主張した私に、不満の見開いた目を向けていたのを思い出します。そんな昔話を檜森さんと話し合う時もなく、彼はやっぱり走り去るように逝った。

死の1ヵ月前の2月23日、私たち獄中にいる人々を支援する反弾圧集会所もたれた折、その集会所にインシアチブを発揮していたのは、60年安保世代のKさんらと、彼、檜森さんだったという。死を計画しながら、心を込めた集いを準備していたのだろうか。

そうか……晩秋に寒あやめを差し入れてくれたあの時から、私は交流が始まったと思っていたけれど、

彼はリッダ作戦30周年の日までに、自らの命を終わらせる準備を開始したのではなかったか。そして、送られてきた文章と手紙に、3月に入って初めて辺事を書いてしまったことが、彼の計画を完結させる役割の一端を担ったような苦い思いが私を襲った。

生き続けてほしかった。「桃園の義」を、その志をレスペクトするからこそ、生き続けてほしかった。それが「リッダ作戦」30年目の総括ではないのか？！ たちのぼる思いがそう叫びたい言葉になって、私の胸に意識されたとたん、涙が溢れた。

2. 彼を弔う

彼の死のニュースは、様々にかけめぐった。はじめのニュース、新聞ではこんな風な記事だった。

「花見客の近く、男性焼身自殺

30日午後6時半ごろ、千代田区の日比谷公園で、『人が燃えている』と、花見客から110番通報があった。男性が園内の噴水近くで全身に焼けどをして倒れており、午後7時半過ぎに死亡した。ライターで火をつけ焼身自殺したと見ている。丸の内署の調べでは、男性のそばに神奈川県の大和市に住む男性（54）の運転免許証があった。この男性の可能性があると見て、身元確認をしている。駆けつけた機動隊員が消火器で消し止めた（後略）

と3月31日の朝刊の記事になった。

免許証によって、身元が判るようにそばに置かれ、きちんと並べられたメモには、彼の字で次のように書かれていたという。

「まだ子どもが遊んでいる。もう潮風も少し冷たくなってきた。遠い昔、能代の浜で遊んだあの小さなやさしい波がここにもある。この海がハイファにもシドンにもつながっている。そしてビジョン・ロックにも。もうちょっとしたら、子どもたちはいなくなるだろう。

3月30日」

翌日になって、彼の遺書が友人たちに届いた。4月3日には、再び新聞記事となり焼身自殺の男性が、“夢を失った革命家一途な死の選択”であるとか、“パレスチナ情勢に抗議の意思”だったというような記事になった。

そして、3月30日付の自宅に残された遺書には、以下のように書かれていた。

「パレスチナの方々へ

侵略国家はいらない

シオニズム・シャロンによる侵略と虐殺、そして人種差別に対するパレスチナの人々の抵抗を無条件に

支持します。

解放に取り組むパレスチナの人々は、私には近い友人のような気がします。日本は侵略戦争体制を急速に増強して、非常に危険な国家になっていますが、侵略戦争の責任を問ひ、日本解放を求める人々がアジアには少なからず居て、私も解放の一端に参加したいと希望してきました。

侵略を既成事実として、イスラエルを認める政治がまかり通っています。特に、パレスチナの人自身を抜きにして国家の平和を取りざたされる残酷な世界があからさまに現れ、言葉を失っています。高度に発達した科学の世界は古代よりも残酷な侵略と虐殺の時代をもたらしました。人間としてもっとも大事な痛みを互いに思いやり、分かち合う心が無残に踏みこじられています。

イスラエルを後押しするアメリカ、その盟友として振る舞う日本への抗議は日本でも小さいながら続いています。シャロンを後押しする側の解体を求めて、その抗議に一人の人間として私も参加します。

イスラエルの解体、すべての侵略国家の解体を！
シオニズムの解体、すべての奴隷制からの解体を！
解放の連帯！

パレスチナに続く海辺で

2002/3/30 土地の日に

ユセフ檜森」

親しかった人々は「やっぱり」「今思い返せば予感があった」という思いと、「何故？」という相矛盾する思いを抱いた。4月2日の火葬には、大学時代、学生運動時代、国際連帯、救援活動など、彼を知る人々が200人以上駆けつけたという。そして、4月4日には田舎の能代で葬儀が営まれた。

その後、4月20日の追悼に参加した大谷弁護士が教えてくれた。印象に残ったのは、郷里での葬儀に参加した友人が東京の集いにも来ていて、「あいつは、郷里も捨て、天涯孤独のようなことを言っていたのに、故郷での葬儀には、親戚、友だち、子どもの頃からの友だちがたくさん集まってくれて、ああ、あれは、彼一流の照れだったと、初めて知らされた」と言っていたこと。

また、お兄さんが、「彼は末っ子で、子どもの頃からやんちゃな奴で、母親にも随分心配かけたけれど、母親思いだった。東京で一人暮らしで、何をやっているのか、いつも母が心配していたけれど、その母が亡くなるのを見届けてから、彼は決意したことが救い

だ」と言われたこと。

旧友の旧日本赤軍の丸岡さんの家族からは、檜森さんは秋田に帰る時は必ず宮城刑務所の丸岡さんへの差し入れに立ち寄ってくれたこと。親族以外は丸岡さんに会えないので、檜森さんの差し入れも、本人に届いて入るかどうかさえ不確かなのに、続けていた、などなど。そんな律儀さが次から次へと報告されたら、大谷弁護士は語っていた。

ペイルートで政治亡命下にある岡本公三さんもメッセージを寄せた。

「檜森さん、僕たちはもう一度会おうと約束しました。そして、パールベックにも、パレスチナにも、必ず一緒に行こうと約束しました。その檜森さんが抗議の自決をしたと皆が教えてくれました。僕は残念です。でも、それは檜森さんが選んだ道だから、僕はとやかく言いません。世界革命の戦士の一人だった檜森さんの冥福を僕は、ここから祈り続けます。魂はいつも一緒です。奥平さん、安田さんのお墓に参る時、いつもあなたのことを思います。ご冥福をお祈りします。」

集いに寄せられた様々なメッセージ、「若者たち！ 檜森のように生きろ！ 檜森のように死ぬな！」哀悼の詩の中に集まった人々の思いが述べられていた。

「一人の人の死に対して、たくさんの人間の悲しみのある世界を願っている」と語っている人が居た。悲しみのある世界、そこには、それぞれの生が大切にされ、涙が流されている。生を慈しむ願いから発する悲しみだから、悲しみは他者を思いやり、共生しようとする意思につながる。命果てたのではなく、命を絶たしたとしても、その悲しみの量は大きくなることはあっても、小さくはならない。

3. 殉教者たち

人々の彼への哀悼の様々を遅ればせに知りながら、気がついている。私は、全く彼を知らないということ。兄さんの語った故郷の秋田での甘えん坊の彼も、酔っ払いの議論好きという「彼奴」も、後に送られてきた初老の写真も、なんとなく彼ではなかった。

人には振り向けば、いくつかの人生の岐路がある。過去という静止した姿を振り返ると、選択、判断をそこで行った結果、次の人生が決まったような時を、自分自身でははっきり認めることができる。目的意識的に選んだつもりでも、阿弥陀くじのような選択の積み重ねだったと、後に捉え返すこともある。

私が彼に会ったのは、多分アラブに来るという選択において、彼が決然と人生の道を決した後の、そう遅

くない時期だったと思う。彼は24歳。私とバーシムは26歳。当時の姿は茫洋としているのだが、輝く目のきらきらした彼を、はっきりと思い出すことができる。彼は、サラハが兄のように、バーシムがリーダーとしていつも一緒にいる姿である。

30年を経て、手紙で交流し始めたのだが、私自身この30年の彼を知らないために、30年前のままの彼しかイメージできず、また、語る手紙の彼は30年前の彼だった。まっすぐに視線を合わせて語るあの頃の彼だ。世間という相関関係の中で、相対化されて変化してしまうことを拒み、30年前の義に、30年、人生を重ねて生き続けたような彼の生。ペイルートで会った時の「彼自身」を持ち続けようとしていたのか、と思う。私は逆に変わり続けること、変わることをしに世界を変え得ないと決意して進んだ。リッダ作戦の戦士たちへの想いを基点に、自らを変え、世界を変えることを目指すのだ。

日本はあれから大いに変わった。リストラに晒され、同世代の中高年の自殺が増えた。その一方で、大阪高検の公安部長が逮捕されるような時代。個人一人で「悪人」であった訳ではなく、その畑、風土として、外務省も検察庁も同類であることを示す制度的疲労の昨今、同時代を生きた者として、檜森さんの生は、対極をなしていたのだと思う。

自分だけ幸せを享受しては、先に逝った人々に申し訳ない、人様に迷惑をかけないように、どう生きべきか……、上昇志向を嘲笑し、虐げられた者の側に立ち続けることを旨とした。彼は、9・11のテロに対しても、言い放った。「ボクは、9・11闘争を無条件に支持する」と。NY世界貿易センタービル及びペンタゴンへの自爆攻撃を敢えて支持する立場を取った。

「私は、一握りの富が、一握りの者共に集められ、多くの民が飢え、餓死に晒され続けている世界では、9月11日の闘いが起こる必然があると思う。(中略)

9月11日の闘いについて戦士たちは絶望の果てに、どのような希望をまさぐっていたのだろうか。帝国主義と超大国とによってもたらされた現実世界に、自らの命をもってノー！と叫んだ彼らの歩みを解き明かすメッセージは、今なお想像し続けるしかない。今の私に確かに言えることは、暴力一非暴力を超えて、侵略一抑圧一搾取の元凶と向き合う中で初めて、彼らのメッセージとの交流が可能となるかもしれないということだ。たしかにそれは、無限の想像をたくましくさせる飢餓下での自己検証である。」

遺書の中でも、「平和的であれ暴力的であれ、人間

の尊厳を回復するための抵抗を無条件に支持します」と語っている。人間の尊厳を回復するために抑圧された者の語るヒューマンイズムは銃で語るしかないとして「リッダ作戦」を闘った戦士たち。彼らとの行動を共にするが故に、9・11を抑圧された者の声として無条件に支持すべきではないのか？ と、彼は語ろうとしていたのだろうか。

知人やお兄さんが、地元の秋田の新聞で語っている。「彼の活動の根底にあったのは、花岡町（現大館市）で起きた花岡事件とみる。強制労働させられ、蜂起の末に拷問を受けて、死亡した中国人労働者への哀れみと、搾取し続けた日本人への怒り。故郷で起きた事件が、抑圧された人々を救う活動につながったと思う。」「加害者である日本人の血を自分も受継いでいると思ったことが、弟の思想の原点のような気がする。」そして、「リッダ作戦」でなくなった被害者と仲間だった人々の両方のためにも、これからも活動していく」と、檜森さんはお兄さんに語ったという。

系譜として、抑圧された側に身を置いて、「平和的であれ暴力的であれ」そうした人々の闘いを無条件で支持するという確固とした観念が彼にはあった。そして、同時に現実には暴力性において他者を殺すなら、自分が命を断つ方を選び取るという、彼の30年目の「リッダ作戦」への解答だったような死だと、私は思う。

人を殺さずに傷付けずに、共に平和に生きたい。命を削りながら、そう思う人々が世界には居る。一人の人の死に対して、たくさんの人間の悲しみのある世界。人間の健全さの証のように死の悲しみを知りながら、人々が命を削りながら闘う現実がある。パレスチナ…

亡国の民は、流れる血脈の中に祖国を描き、生き続ける為命を捧げる。

戦後、ヒットラーのユダヤ人虐殺、第二次大戦処理の中で、人工的に作られたイスラエルという国。そこに住んでいたパレスチナの民を追放し、その半世紀を経た今も難民として認定されている人々で350万人を超える。先祖以来住んでいた土地に他人が来て、土地を奪い、主人のように振る舞う不条理、不正義の下に、パレスチナ人は、ずっと置かれてきた。その現実が、今も、日々、益々悪化し、半世紀を経てなお、自分の民族のリーダーがイスラエルの国家政策として暗殺されている。アメリカの後ろ盾のもとで、イスラエルが軍事的自由をほしいままにしている時、パレスチナの若者たちが、自らの命を賭けて自分の身体を

武器にしてでも闘おうとする行為がある。「やめろ！」と言いながら、解決案を一向に出さない『現代世界』がある。「自爆テロ」と呼ばれ、国際社会から非難される一方で、殉教者として、自らの命を人々のために捧げる現実。

日本でも、戦時中、多くの若者が命を削り、命を捧げて、「日本」のために闘ったのではなかったか？ その心情においては相等しいものがある。「祖国の窮状を救いたい」、「祖国のために自分の命を捧げて一矢報いることができるなら、自分はどうなっても構わない」。それは、見返りを期待しない一心の故郷や、家族・兄弟たちへの愛に貫かれている。

この心情は、民族の結束の強さを示しているだろうし、また、この民族の心情が国家政策へと崇められ、利用されることによって、日本には、人間を道具と化した悲しくも間違った闘い方があった。

パレスチナでは、自然発生的な人々の心情が、止むに止まれぬ「自爆攻撃」を拡大させてしまっている。しかし、それは国家政策として賛美されている訳ではない。14歳の少年たちが、友人3人で、こっそりと、自らの死を覚悟した闘いについて、自爆攻撃を行ってきたと言われるパレスチナ最大の大量組織ハマスは、4月25日、緊急声明を発表したという。『余りに多くの若い命が奪われれば、将来のパレスチナの闘いに破局をもたらす』として、子どもは、武力闘争に加わるべきではないと呼びかけ、教師や、イスラム教指導者が、命の尊厳を十分教えてほしいと訴えたという。

ああ、パレスチナは健全だな、戦時の日本のように、国を挙げて、自爆行為を祭り上げていない。私は、新聞記事を読みながら、思わず、命の価値を奪われる環境の中で生きて、「生きよ」という人々の訴えに、胸が震えた。

人が命を止むに止まれず捧げる現実には、それに連なる歴史と社会がある。その原因を直視し、そこに公平と正義に基づく解決を実現しない限り、人間社会は危ういと思う。

21世紀に入って、9月11日を経て、『世界は変わった』という。果たして、そうか？ 世界を変えた冷戦思考の人が、反「ソ連」に代わって、新しい「反テロ」という名で、21世紀の力の支配秩序を無理矢理再構築しようと企んでいるだけではないのか？ 「冷戦思考」とは、誰かを敵とすることによって、自己の絶対的価値を正当化する方法である。「反テロ」の名におけるアフガン報復、さらにイラク、イラン、

北朝鮮の「悪の枢軸」。かつてのタカ派の守旧の人々が、軍事力に頼り、「世界は変わったのだ」と統制して、21世紀をめざそうとしている。多様性、多面的な文化の中で、人間には軍事力よりはるかに勝る知恵と文化があり、共生する力があることを、日本こそ、九条に基づいた非軍事的な国際関係の中で示しうるし、新しい21世紀のパラダイムを発信する価値を持っている。日本は米国の価値に合わせれば、合わせるほど、危機が進行し、価値崩壊していく。今の小泉政権にはそれを感じるし、有事法制もまたその結果の議論に過ぎない。日本は、米国と相対的別個な歴史的価値観をパラダイムとする国際社会への発信をできる地位にありながら、30年の制度疲労は、国や民を思う官僚を失い、自己の財テク、自己の個人的利益のために生きる人々を拡大再生産させた。民や国を思う人々が出世できない構造に、この30年、変わってしまったのだろうか？

檜森さんの生は、こうした人々との対極にあった。檜森さんは、30年以上も前、当時多くの学生だった人々が平和と公平と正義を求めベトナム反戦に立ち上がったように、立ち上がったうちの一人の学生だった。30有余年、日本は変わり、バブル金満の時を経て不況の時代を迎えている。アラブでは、解決されるべき平和は訪れていない。一人では何もできない、他者を傷つけるなら、自らの死をもってこそ闘う。檜森さんの眼に、30年前の友人たちの闘いが、いつもあっただろう。だから、過分な幸せは受け取らない。アラブは尚、激しい屈辱と暴圧の中で、「土地の日」を迎えた。もう言葉での連帯では一体化できない。30年目の節目を5月30日に迎える「リッジ作戦」の日までに決着をつけねばならないと、彼は、9・11以降、計画的に生き、そして、自決したと私は思う。

30年目の5・30を間近にして、今思う。私も、パレスチナの解放の闘いに参加し、アラブで過分な感謝と闘いへの支持を得て、有頂天となり、日本を変える力になれるのではないかと、不遜にも思って過ごしてきた。アラブの民衆の恩義の支援に支えられ、そこに身を置き、日本の変革をめざした。帰国し過ごした3年間の日本は、数十年ぶりに変わっていたし、また、今も変わり続けている。かつての年月への反省を込めて、生き続け、それぞれの持ち場で日本を作り直さなければいけないのだと改めて思う。

そしてまた、2002年パレスチナの若者に呼びかけたい。闘い方は彼ら自身が決定することであるけれど、君こそ生きろ！と言いたい。命を捧げて、民族

を救おうと願う心を持った君こそ生きろ！ シヤロン政権が暗殺を国家政策として、パレスチナのリーダーを次々と殺している限り、生き、闘い続けることによって反撃して欲しい。正義に基づく公正な平和を求めるが故に。それが、リッジ作戦が切り開いた希望の30年目の今日の闘い方ではないのか？

30年目の5月30日を迎える今日、これまでの間違いや、様々のいきがかりを語り合える友として、檜森さんに生きていてほしかった。友人たちのためにも。

死の直前に投函された3月30日付の檜森さんからの便りには、次のように記されていた。

「お手紙、ありがたくいただきました。何度か繰り返し読ませていただきました。返信を考えましたが、文字にならず、時が過ぎてしまいました。最後に、初めてお会いしたときのような笑顔で接し合えたかと思うと、人間捨てたもんじゃないと思っております。

(後略) 3月30日 ひもり 拝

「彼のように生きろ！ 彼のように死ぬな！」。30年前に会った面差しを描くしかない私は、初老の彼の写真に初老の自分に気付かされながら、まだ信じきれない思い。合掌。 2002年4月記

読者からの声

*第87号ありがとう。辻邦さんが「イスラエル軍の規律とモラルの崩壊」を指摘されていましたね。まさしくこの問題を撮った映画「沈黙を破る」(土井敏邦監督)が5月に東京・ポレポレ東中野、大阪・第7芸術劇場、京都・京都シネマなどで、上映されるそうです。侵略国家の精神的腐敗、軍隊と人間の普遍的問題が照射されています。先日アメリカの命令拒否兵士を支援する「Courage to Resist (抵抗する勇氣)」メンバーの来日講演がありました。また「中国帰還者連絡会」や沖縄戦の証言などでも明らかです。しかし、まだこの国では「従軍慰安婦」問題は、反省・解決されていないし、自衛隊内の性暴力事件も頻発しています。課題として闘わんとあきませぬね。カンパ送ります。

4月10日 大阪市 M. T.

*いつも通信をお送りくださり、ありがとうございます。私どもが出している不定期通信を重信さん他の皆さんに送るようにします。「オリーブの樹」へパレスチナ連帯のカンパです。

4月16日 アハリー・アラブ病院を支援する会

シゲに捧げる「私小説」その76

山田 美枝子

術後、健康を取り戻しつつあるシゲ、あなたに四月一日東京拘置所の面会室で久しぶりに会えましたね！ 理不尽なたった八分という面会時間でしたけれど。でも会えば昨日会ったばかりのように話をはじめられるのは、青春時代とお互い変わってないからではないかしら。あなたはまったく変わってません。小説の師の駒田信二先生が「人間は、昆虫のように羽化できるわけではありません」とおっしゃってました。それは離婚した人が自分の体験小説に「羽化」というタイトルをつけたことを戒められたのです。羽化できない私たちはお互いを昔のままに見つめあうしかありませんが、それもいい面もありますよね。また会いに行きます。

小学生でも星美は芯になにか堂々としたところがある性格と思えた。私のような姑息さがなかった。私は、小学生のころ、強い子、物持ちの子に媚びてうまく立ち回るすばしい少女だった。だからいじめられなかった。逆におっとりとした子をいじめたりした。星美は逆だった。星美よりゆっくりした子や、学校でいっさい口がきけない子供といつの間にか友達になり、それら弱い子の母親たちから私は感謝されたりした。

「星美ちゃんだけが、うちの子と遊んでくれるようなんです」

などといわれたが、他の母親からは、逆のことをいわれた。

「星美ちゃんいじめにあってるみたい、トイレ掃除をひとりでさせられてみたいよ」

それは、勉強の出来る、すばしい子供のグループが星美をいじめ、星美は、弱い子の代表でいじめられ、帰宅時は、その弱い子たちが教室の外で星美を待つと一緒に帰ってきたりしたのだった。それらは後で私が知ったことなのだ。星美は自分がいじめを受けてることに敏感でなかったということなのだろうか。

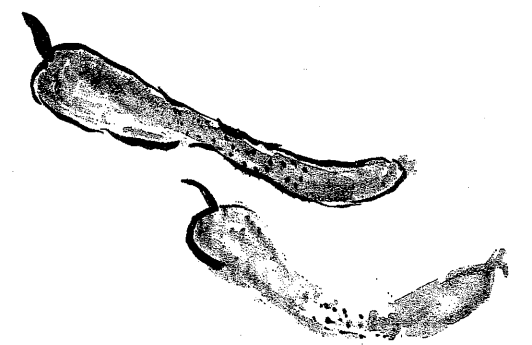
私がほかの母親からの言葉で知り、あなたはいじめにあっているの、と聞いて、初めて涙をみせたのだった。そんな近所の公立小学校のいじめの世界から星美を引き離そうと、中学は他県の私立に入学さ

せることにした。「子供は親の成績表だ、」と書かれたヴァイオリンの教育者の書いた本があったが、私にとってやはり星美は私の成績表に違いないと思えた。

隣の県にある私立の中高一貫教育の女子校に星美を推薦で入れることが出来た。私は入学前の春休みに星美に言って聞かせた。

「新しい学校で、新しい環境になり、初めて会うお友達ばかりなのだから、星美ちゃんも新しくデビューするのよ。今までのようにいじめる男の子もいないし、元気に大きな声で挨拶して入っていくのよ」

星美は頷いていた。十歳で初潮になった星美は、身体もクラスの中で大きいほうになり、色白で髪は黒麻色のきれいな少女になった。眼鏡も、十歳で視力が0・8になり、はずしてアラレちゃんのキャラクターではなくなった。その頃から男の子が意識していじめに加わってきていたのだ。人をじっと見るくせのある星美にジッチロ菌、というあだ名をつけて、星美の配る配布物は汚いなどと言われたらしい。私の力の及ばないところで、星美がゆがめられては大変だと、浩介を説得して、公立学校という近隣の子供たちから引き離れた。結局それは正解だった。星美と一緒にいじめを受けていた数人のおとなしい女の子たちは、中学に進んでから、登校拒否になり、引きこもりが二十歳すぎてまでつづいたのだ。星美は、その女の子たちとは、卒業後ずっと電話やメールでつきあっている。(つづく)



面会について

調整なしに面会に行っても、予定している面会者とぶつかれば会えないことになります。

以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。

- ・面会は1日につき1組（3人まで）しか許可されていません。
- ・面会時間は、不当にも、午前中は10分、午後は8分のみです。時間を有効に使う工夫が必要です。
- ・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。

曜日——重信さんとの関係（調整担当者）

★月曜日——明治大学の友人・知人（小川健）

★火・水曜日——一般（山本万里子）

★木・金曜日——親族と一般（大谷みどり）

*山本万里子 TEL: 090-4367-5389 E-mail: mariko481@hotmail.com

*大谷みどり 携帯メール: midorinkeitai@docomo.ne.jp E-mail: the-5th-element@hotmail.co.jp

*トラブルを避けるため、重信さんには事前に日時と面会者名をお知らせします。1週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

後記

つつじの季節になりましたね。通りの並木は、桜が散ってしまって、はなみずきが満開です。ベランダでは、ゼラニウムがどんどん葉を繁らせ、真っ赤な花房を幾つも付けています。欄干にかけたプランターには、ピンクのカーネーションが溢れるように咲き乱れています。松葉ボタンはまだですが、昨日、紫のクレマチスが突然に一輪咲きました。なんとも、この花が好きなので、ちょっと幸せです。

豚インフルエンザ騒ぎで、予算関連のニュースが霞んでしまって、いつの間にか決まってしまうようですが、総額15兆円が、私たちにばら撒かれるということで、あたかも得をしているような気分させられていませんか？ だって麻生さんの支持率がわずかながら上がっているではありませんか！ 何のことはない、私たちの税金が計画性も見通しもなく、使われそうだとすることに過ぎません。ご存知ですか？ 15兆円ということは、一人当たり25万円の税金が使われるということだそうです。適切に使われているのでしょうか？ なんでも、麻生総理が漫画好きだからか、「漫画施設(?)」を新たに作る計画まであるのだそうです。そんなことより、安い給料で働かされている介護労働者の給料を上げることや、不定期労働者に職を保障することや、医者や医療施設を補強することや、母子家庭を支え、保育所を増やすことや教育の保障や「後期高齢者」が心配なく暮らせるようにするとか、いくらでも必要な予算分野があります。第一、年金問題はどようになったのですか？ 解決の見通しは全く見えていません。日本という国はこれほどまでに情けない国になってしまったのでしょうか？

重信さんの術後の体調は、快方に向かっていると思っていましたら、なぜか腫瘍マーカーの数値がいろいろ上がっているとのことで、心配です。悪くなる条件は無いように思いますが、連休明けの検査の結果を待つしかないようですね。どうか問題が大きくなっていませんように。重信さんには、無理をしないで、ゆつたりと休養するよう気をつけてください。 (Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第88号

①7P左上から19行～20行目

②7P右上から21行目

③13P左上から7行目

④13P左下から2行目

⑤13P右下から18行目

⑥14P右下から11行目

⑦15P左上から3行目

4月 17日の→4月 22日の

その生きすぎ→そのいきすぎ

泡だった→粟立った

殺すことによって。→殺すことによって、

国家攻撃→国家政策

思い出します。→思い出す。

初めて辺事を→初めて返事を